

# シュンペーターにおける信用の概念

- シュンペーターはなぜ貨幣論を完成できなかったのか -

石川 淑子  
飯田 裕康

目次：

序章 問題の所在と研究史

第1章 フレームワークとしての貨幣観

1. 世紀転換期におけるオーストリアの貨幣論とシュンペーターの貨幣観
2. 貨幣の価値 貨幣指図証券説と銀行貨幣
3. 経済循環における貨幣

第2章 シュンペーターの信用理論

1. 経済発展における貨幣
2. 経済発展における信用

第3章 二つの異なる経済形態における貨幣と

序章 問題の所在と研究史

「私の貨幣に関する書物はあまりすすんでおりません。私の問題点は、以前あなたが取り組んでおられるとお話になったものと同じところにあるのではないかと思います。」(1928年8月)

「私はしばらくの間、(ハーバード、日本を訪問するため)私の貨幣に関する書物を未完成のまま出発します。その書物の完成は、今はしば

信用

1. 「循環における貨幣」と「発展における貨幣」
2. 「信用 = 貨幣 = 資本」の理論 信用創造理論との関係において
3. 信用概念の未整備 貨幣論の完成をめぐる
4. 「貨幣の信用理論」との関係

結論

参考文献

らく待たなければなりませんし、この先の研究計画は全くたっておりません。(1930年9月)<sup>1)</sup>

これはシュンペーターのケインズ宛て書簡の一節である。当時、彼は大蔵大臣、銀行頭取の二度にわたる実務経験に挫折し、ボン大学で教鞭をとっていた<sup>2)</sup>。そして貨幣論の完成に向け悪戦苦闘していた。自らライバル視していたケインズに宛てたこれらの書簡は、貨幣論完成へのシュンペーターのこだわりと苦悩を如実に表している。

シュンペーターの貨幣に関する代表的な著作

1) [1] p.341

この2通は出版されていないケインズ書簡集としてマーク・パールマンが保管しているものをアーリーがコピーして引用したものである。邦訳、括弧内の加筆は筆者。

2) 1919年カール・レンナー内閣、大蔵大臣に就任。第一次大戦後の混乱の中、約7ヶ月で辞任。

1921年、ウィーンにある古い伝統と格式を持つ商業銀行「ヴィーダマン銀行」の頭取に就任。

1924年、ヴィーダマン銀行破産。シュンペーターは多額の個人的負債をかかえて頭取を辞任する。翌1925年から1932年の渡米まで、ボン大学教授を務める。

としては1917年の論文“Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige”があげられるが、その後1920年代にかけ、シュンペーターが先の引用文で示唆している「貨幣に関する書物」の作成に取り組んでいたことが、知人への書簡などから確認されている<sup>3)</sup>。1917年の論文は終始一貫して静態経済での分析にとどまっており、発展の過程すなわち動態における貨幣論を完成させることはシュンペーターにとってなにより重要な理論的課題であった。しかしこの課題への試みは中断され、達成されることはなかった。1930年、ケインズの“A Treatise on Money”が出版され、それを読んだシュンペーターは自らの研究を中断することを決意し、それまでの草稿を焼却してしまったといわれている<sup>4)</sup>。彼の死後発見された原稿は未完成のまま、1970年マンの手により編集され“Das Wesen des Geldes”として出版されている。またシュンペーターは『景気循環論』においても随所で貨幣論の出版をほのめかしており<sup>5)</sup>、晩年に至るまで自らの貨幣・金融（信用）論の体系化を試み、その完成を熱望していたことが確認されているのである。

シュンペーターが貨幣論を完成できなかったことは、今日に至るまでのシュンペーター研究に大きな影響を与えており、シュンペーター研究において貨幣・金融（信用）理論を深く掘り下げた研究が表舞台に出ることはきわめて稀で、この分野が軽視されてきた背景にシュンペーターの貨幣・金融（信用）論体系の未整備があることは明らかである。

シュンペーター研究の今後の課題としては、大きくわけて次の三点が考えられている<sup>6)</sup>。第一に先行世代オーストリアンから離反したシュ

ンペーターの社会学、人間行動論、第二にシュンペーターの金融理論、貨幣理論。第三に社会主義不可避論である。しかし、これら三つの領域はそれぞれが独立に存在しているのではなく、密接に絡み合って「シュンペーター体系」を構成していると考えられ、その中でも「金融理論・貨幣理論」は特に重要な要素であり、シュンペーターの経済理論の核を形成していると考えられる。社会主義不可避論はその経済理論から必然的に導き出された帰結であり、シュンペーター独自の社会学、人間行動学は経済理論を補完するための手段であると言えるだろう。このように貨幣・金融（信用）理論の分野におけるシュンペーターの業績を再確認することへの関心は高まっており、最近ではアーリーを中心に国際シュンペーター学会においても貨幣・金融（信用）理論に注目する動きが起きているのである<sup>7)</sup>。

これまでのシュンペーター貨幣・信用理論研究の系譜を簡単に追ってみると、Marget, A.W., The Monetary Aspects of Schumpeterian System, 1951. ([37]Vol.1所収、邦訳「シュンペーター体系の貨幣的側面」[3]所収)を初め、Minsky[13]、Earley[1]、[2]が代表的なものであるが、日本においても三輪[63]、[64]、[65]、木村[47]が1950年代から、シュンペーターの貨幣・信用理論を研究対象としている。

マーゲットの研究は、シュンペーターの理論構造のフレームワークをなしているものは、実物的な側面におけると同様、貨幣的な側面においても、経済生活の「循環の流れ」に注目するケネー＝ワルラス的思考方に他ならないとする解釈を明確にしており、今日にいたるまでのシ

3) [28] 174頁

「1929年、東畑精一への私信で「貨幣論」に関する研究をすすめている旨を明らかにする。」

4) [32] p.76

5) [32] p.109 邦訳( ) 160頁

「著者はその『貨幣論』の中で、この背景を提供し、これらの命題を包容する理論的な構造を発展したいとねがっている。」

6) [32] p.544 邦訳( ) 807頁

7) [1] p.337

シュンペーター貨幣・信用理論研究を大きく方向付けたものであると考えられる。ここで用いられているケネー＝ワルラス的「循環的流れ」とは、貨幣支出に対して売られるものへの貨幣支出の流れの体系、「支出の流れのタームでの経済過程の理論」として理解されている<sup>8)</sup>。これは貨幣が商品の価値形態として経済過程すなわち再生産過程を流通していることを表現しているのである。

日本においてもシュンペーターの貨幣論がケネー＝ワルラス的流通経済を理論的フレームワークとしているとする解釈は浸透しており、シュンペーター貨幣・信用理論の研究者に共通の認識であるといつてよいであろう。

木村[47]は静態的循環経済における貨幣の機能、貨幣価値に関するシュンペーターの見解を学説史的に考察した論文であり、シュンペーターの理論の基底にあるものは流通経済であることを指摘している。

三輪の研究は静態経済の研究から発展させ、動態経済における貨幣、信用を対象にしている。三輪はシュンペーターの経済学は静態にせよ動態にせよ、すべて流通経済を基礎にしており、貨幣はその媒介として必要不可欠だとする視点から議論をすすめている。中心的な問題関心はシュンペーターの信用創造理論にあり、通貨論争期における通貨主義と銀行主義の貨幣観との関係からシュンペーターの貨幣観を学説的に分析している。このような立場から研究をすすめるに当たって問題となるのは、古典派経済学以降問題にされ、経済学史上の普遍のテーマともいふべき、貨幣と信用の取り扱いとその区別の問題である。この問題は、周知のように、19

世紀前半のイギリスにおいて、イングランド銀行券の発行制度および金融政策をめぐる提起されたものであり、シュンペーター自身、通貨論争期の経済学を叙述する際にはこのような問題意識に依っている。したがってシュンペーター貨幣・信用理論をめぐる先行研究文献には、シュンペーターを通貨主義ないし銀行主義いずれかの流れに位置づけようとする傾向がしばしば見受けられる。

三輪の研究ではシュンペーターを通貨主義の貨幣観の潮流に位置づけている。その論拠として信用創造論者に共通の基本的理論構成をあげている。銀行による信用創造機能を主張する「新しい信用理論」において、銀行は授信＝貸し付けることによって預金・小切手を生み、しかも小切手は商品流通過程において一般的支払手段として機能するから、それは貨幣と同一であると解釈されている<sup>9)</sup>。このように預金通貨ないし小切手を貨幣と同一視し、さらにこれらの通貨と景気変動を論じたことから、シュンペーターの貨幣・信用理論を通貨学派の理論的発展であると捉えたのである。

しかし、シュンペーター自身が自らの立場がいずれに近いのかを明白にしていないことから<sup>10)</sup>、研究者によって異なる解釈がなされる余地を残しているといわねばならない。

他方、アーリー[1]、タルル[34]などは三輪の解釈とは反対に、シュンペーターの貨幣・信用理論を銀行学派の流れに近いものとして論じている。

アーリーは銀行学派の流れに信用主義者と呼ばれる一つの潮流をみる<sup>11)</sup>。アーリーによる信用主義者の定義とは次のようなものである。第一に、信用に主要な関心を注ぎ、信用現象をマ

8) [37]Vol.1 p.180 邦訳[8] 180頁

9) この論点の最新の展開については、大友[51]を参照されたい。

10) この二つの『理論』[通貨学派と銀行学派]の相対的な長所と、われわれが両者のいずれにも賛成しえない理由について、正しく均衡のとれた印象を伝えることはきわめて困難である。」 [22] p.115 邦訳( ) 168頁

11) アーリーの信用主義者には次のような名前が挙げられている。ソートンと銀行学派の学者達。J.S.ミル、バジョット、ロバートソン、ホートレー、ヒックス、ケインズ。アメリカにおける信用主義者は、フィッシャー、ミッチェルを挙げており、ヨーロッパ大陸におけるこの思想の創始者はヴィクセルであるとしている。シュンペーターはハーンとともに、中央ヨーロッパ(すなわちこれはドイツ語圏を指すと考えられる。)における先駆的な信用主義者であると評価されている。この問題については本論文第二章で考察する。

クロ経済の動きを決定する基本的な変数と捉え、分析に用いていること。第二に「貨幣の信用理論」を用いていること<sup>12)</sup>。「貨幣の信用理論」とは貨幣を内生変数として捉え、その動きは信用によって決定されると考える理論と定義してよいだろう。第一の点ではシュンペーターは疑いなく信用主義者であるということができる。しかし第二の点においては、シュンペーターは若干の問題点を残している。シュンペーターの信用概念は、流過程にある信用のみがその機能を果たしうると考えるなど狭い範囲での金融資産しか把握していない。アーリーの想定する信用主義者の貨幣信用概念はシュンペーターの貨幣、特に信用の概念よりもはるかに広範囲の金融資産を含むものであり、この点からアーリーはシュンペーターを「挫折した信用主義者」と分類し、むしろ評価している。シュンペーターが狭い範囲での信用概念しか持ち得なかった原因を、アーリーはシュンペーターのフレームワークであるケネー＝ワルラス的貨幣観との関係から分析する。さらにフレームワークにおける貨幣の交換（流通）手段機能と動態経済における貨幣の機能との両立不可能性を次のように指摘している。

「シュンペーターが、信用も流通しなければならぬという考えを放棄することができなかったことは大変残念なことである。この考え方は貨幣の交換手段機能を基礎にしており、シュンペーター以前にマルクスが、シュンペーター以降にはケインズが気付いていたように、これは動態的分析とは両立しがたいものなのである。<sup>13)</sup>」

アーリーは貨幣の動態的な分析には、貨幣の交換手段以上の機能が考察されることが当然であると考えている。例えば、流通していない退蔵（蓄蔵）貨幣の形態で存在する貨幣も動態経済の分析に際しては議論の対象になりうべきも

のである。シュンペーターはアーリーが指摘するフレームワークの貨幣観を絶対視するあまり、退蔵貨幣に本質的な役割を見出すことができなかった。この問題は第3章3節において取り上げたいと思う。シュンペーターの貨幣論の完成を妨げたものはまさしくこの点、すなわちフレームワークの貨幣観と動態的貨幣分析の両立不可能性に存在していたのではないだろうか。

シュンペーターが貨幣論を完成できなかった原因を考察することは、シュンペーターの貨幣・信用理論を理解することへのカギになると考えられる。三輪の指摘するようにシュンペーターの経済理論は動態においても静態におけると同様、貨幣を媒介にした流通経済の上に成立している。したがってシュンペーターにとって貨幣・金融（信用）論体系の完成は、経済学者としての至上命題だったのであり、その課題を成し遂げることができなかったことは最大のフラストレーションであったと言えるだろう。本論文では、アーリーによって提起された問題、つまりシュンペーターの理論フレームワークと信用概念の関連に注目し、その点に貨幣論の完成を妨げた原因の糸口を求め、検討を加えたい。

ケネー＝ワルラス的循環経済において、貨幣は外生的なものと考えられているが、シュンペーターが経済発展の過程において想定した信用創造により増加する貨幣は、実物経済に対して内生的なものとして捉えられている。この点にまず、フレームワークのもとに展開される貨幣観と彼の信用創造理論とのあいだのギャップが存在する。さらに「静態における貨幣」と「動態における貨幣」としてシュンペーター自身が区別しようとしたものは、まさしく古典派経済学以来試みられてきた「貨幣と信用の区別」に他ならなかった。そしてフレームワークである貨幣観へのこだわりが、信用や資本の概念に混乱を生じ、動態的な貨幣の把握を困難にしたのではな

12) [1] p.338

13) [1] p.349 邦訳は筆者。

いかといった点を検討してみたい。

## 第1章 フレームワークとしての貨幣観

### 1. 世紀転換期におけるオーストリアの貨幣論とシュンペーターの貨幣観

シュンペーターは『経済発展の理論』（以下『発展』と省略）第一版の序文において、自分の研究の出発点を次のように述べている。

「私はむしろ具体的、理論的問題から、すなわち、初めは1905年に恐慌問題から出発したのである。<sup>14)</sup>」

1905年、ウィーン大学法学部に在籍していたシュンペーターはベーム＝バベルクのゼミに参加する。このゼミナールはミーゼスやゾマリー、そして若きマルキスト達、すなわちオットー・パウアー、ヒルファディング、アルビン・ジョンソン、エミール・レーデラーなど錚々たるメンバーを中心に繰り広げられた。シュンペーターが多大な刺激と影響を受けたであろうことは容易に想像できる。後にシュンペーターはメンガーへの弔辞文において、人生の20代のことを「かの神聖で実り多き10年間（that decade of sacred fertility）<sup>15)</sup>」と呼んでいる。これはみずからの経験に照らして表現したものであろう。さらに世紀転換期におけるオーストリア経済は1900年の恐慌のあと、物価騰貴をとめないながらケルパー内閣、ベーム＝バベルクによる大規模公共事業による鉄道建設主導の好景気が続き、1907年にふたたび恐慌に陥る周期的な景気循環を経験していた<sup>16)</sup>。若きシュンペーター達がこのような現象に対して何らかのヴィジョンを得

たのは当然のことであったといえよう。

19世紀後半から20世紀初頭にかけてのオーストリア経済を考える上で、その大きな特徴となっているのがきわめて変則的な通貨事情である。1848年、度重なる戦争の費用調達のためオーストリア政府は正貨兌換を停止した。これを境に銀貨の紙券に対する打歩が生じ、1859年オーストリア・フランス・イタリア戦争の際には53%まで銀打歩は上昇した<sup>17)</sup>。しかし1863年頃から世界的な銀価値の低下が影響し銀の打歩は減少し始め、1878年にはほぼ消滅するに至る。その背景には各国が相次いで金本位制へと移行したことが関係している。そして翌1879年、オーストリア政府は銀インフレ防止策として銀の自由鑄造を停止する。これを契機に、紙幣がその本位金属（銀）に対してプレミアムをもつ奇妙な現象が起こり、グルデン銀貨は下限としての銀価値と上限としての金価値の間で激しく変動し、金銀いずれとも制度的に結びつかなかったために極めて不安定な状況におかれることになった<sup>18)</sup>。

こうした歴史的経験はドイツ語圏の経済理論に多大な影響を及ぼし、特に貨幣理論の分野においてはそれまで支配的だった金属主義にかわり、名目主義の潮流を生み出すなど、理論的發展の直接的な原動力となったのである。クナップの「貨幣は国家の法秩序により承認された支払手段である」とした「貨幣国定学説」はその代表的な例である<sup>19)</sup>。

このように世紀転換期におけるオーストリアの貨幣理論はまさに実際的问题に誘導される形で展開し、発展していった。シュンペーターの問題意識が芽生えた20世紀初頭においてもこのような傾向は見受けられ、その好例として、ヒ

14) [18]viii,邦訳(上) 3頁15) [1] p.338

15) [26] p.87

16) オーストリアの歴史記述にあたっては、主として戸原[69]、佐藤勝則「オーストリア・ハンガリー中央銀行政策と世界市場 金本位制下の再生産 = 信用構造危機把握のために」( [59] 所収) に依拠した。

17) [54] 10頁

18) [54] 17頁

この時代は事実上、「紙幣本位の時代」ということができるであろう。

19) [10]p. 1, 邦訳は筆者。

ルファディングの名前を挙げることができるであろう。戸原[54]がヒルファディングの貨幣論はオーストリアの事態を現実的背景として生まれた「純粹オーストリア的理論<sup>20)</sup>」であると指摘するように、オーストリアの通貨事情はシュンペーターと同時代の貨幣理論にも大きな影響を残しているのである。

しかし、シュンペーターの関心は「オーストリアの通貨事情」よりはむしろ「ドイツ語圏における貨幣理論」に向いていた。イギリスを中心に発展してきた貨幣理論をいかにしてドイツ語圏においても定着させるかは、通貨問題への関心が高まった当時のドイツ語圏の経済学者に与えられた至上命題であったといえるであろう。したがってシュンペーターの議論の対象になるのは個々の通貨問題ではなく、貨幣理論の分野における過去の諸業績と、その批判的分析についてであり、このような姿勢は処女作『理論経済学の本質と主要内容』(以下『本質』と省略)にすでに見受けられる。

シュンペーターは20世紀初頭までの貨幣理論には全く満足しておらず、現状の貨幣理論の問題点は実践的問題が先行し、理論的枠組みが整備されていないことにあると考えていた。『本質』においてすでに、貨幣に関する個別の理論的枠組みの必要性を以下のように強調している。

「他のいかなる領域におけるよりも一層、貨幣制度の領域において、歴史家も実際家も理論の研究に従わねばならない。何らかの貨幣政策の影響に関するごく些細な主張でさえ、不可避免的に多少の「理論」を含むのである。<sup>21)</sup>」

シュンペーターの貨幣に関する代表的な論文である「社会生産物と計算貨幣」の問題意識からも、貨幣論の分野において必要とされている

のは実証分析をする以前にその理論装置を構築することにあると考えていたことは明らかである<sup>22)</sup>。

このようにシュンペーターの貨幣論は、実物経済の諸問題から帰納的に導かれたのではなく、自らの経済理論における貨幣論のあり方を模索することから出発しているとみてよい。後に『経済分析の歴史』において、シュンペーターは「貨幣の要素を分析的構造の基盤そのもの(very ground floor)に導入する<sup>23)</sup>」ことを主張しているが、この思想は研究初期の頃からシュンペーターの念頭にあったものにちがいない。このような立場から考えるとシュンペーターの貨幣観を考えていく上で、彼の経済理論のフレームワークがきわめて重要な意味を持っていることが分かる。

## 2. 貨幣の価値 貨幣指図証券説と銀行貨幣

貨幣に関する理論的な基礎問題としてシュンペーターが第一に考えたものは貨幣の価値に関する議論である。前節で述べたように世紀転換期は19世紀に支配的であった貨幣商品学説にかわり、名目主義の台頭がみられた時代である。

『本質』においてシュンペーターは貨幣の機能を交換手段機能と価値尺度機能の二点にあると考え、さらに両者は明確に区別されるべきであると主張している<sup>24)</sup>。さらに貨幣が必然的に充足するのは前者(交換手段)の機能のみであって、後者の機能は通常は充たされるが、常に充たされるとは限らないと述べている<sup>25)</sup>。

シュンペーターが交換手段機能を貨幣の第一の機能とした理論的裏付けは、理論フレームワークであるワルラス的一般均衡理論と密接な関

20) [54] 28頁

21) [17]p.297 邦訳(上)475頁

22) [20]p.30 邦訳4頁

23) [23]p.278 邦訳第2巻581頁

24) [17]p.288,邦訳(上)463頁

25) [17]p.290 邦訳(上)466頁

わりを持っている。そもそも貨幣の必然性を導き出すに当たって、シュンペーターは裁定取引（間接交換）の中にその必然性を求めている。

「間接交換なくして自由競争はありえず、間接交換は自由競争存立の不可欠な要素をなすと。それゆえ格段に大多数の場合に、狭義の「欲望」からではなく、もっぱら市場機構の技術的な必然性から説明されうる　一つまたはより多くの　財貨への需要が存在するであろうし、また存在しなければならない。<sup>26)</sup>」

「二種類以上の商品が二人以上の個人の間で交換されねばならなくなるや否や、その目的が全部あるいは一部、再交換のための財貨の獲得であるような交換行為が始まるであろう。このような交換行為の対象になる財貨はすべて、その限りにおいて貨幣である。<sup>27)</sup>」

しかしこの段階では間接交換における再交換のための多数の財を貨幣と定義しており、『発展』以降にみられる交換手段と価値尺度の両機能をもつ唯一の財としての貨幣は想定されていない。

次に第二の貨幣の機能としてシュンペーターがあげた価値尺度機能については、交換手段機能に並行して価値尺度機能を説明しようとする、貨幣に何らかの内在的価値を見出さざるを得ない。つまり、その価値尺度機能において他の商品の価値をはかるためには、貨幣は他の商品と同様の意味において価値評価の対象にならねばならないからである。『本質』におけるシュンペーターの立場は、貨幣の価値を、それを構成する金属に求めようとする金属主義を否定してはいるものの、貨幣が貨幣である前に素材價

値を持つ商品でなければならないとする立場を捨てきれないでいる点では、まだ商品貨幣説あるいは金属貨幣論の立場に立っていたと考えることができる。したがって、『本質』においては金属主義の批判にとどまり、自らの立場を表明するには至っていない<sup>28)</sup>。シュンペーターの貨幣観の進展は、むしろ『本質』から『発展』へ移行する過程において見ることができる。『発展』においてはじめて貨幣価値をその素材価値から切り離すべきだとする立場をはっきりと表明し、商品貨幣説からの脱却を試みるのである<sup>29)</sup>。

貨幣に内在的な価値を求める立場を放棄するに当たって、シュンペーターは前節で述べたオーストリアの変則的な通貨事情（不換紙幣が流通するという事実）を例にあげ、経験的にも上の概念が当てはまることを示している<sup>30)</sup>。そして名目主義の立場を支持するのだが、貨幣固定説は「商品学説の誤謬よりもひどい誤謬である」として批判される<sup>31)</sup>。なぜならば国家による命令は経済外的な要因であり、貨幣の価値を説明しうるものではないと考えられるからである。

これに対してシュンペーターは、「貨幣は一見したところでは単に任意の財の異なる量に対する一般的な指図証券、あるいはいわば「一般購買力」として現れる。<sup>32)</sup>」とし、名目主義の流れを汲むベンディクセンに代表される貨幣指図証券説を支持する。そしてその概念が主観的価値評価から完全に独立していることを、併せて主張したのである<sup>33)</sup>。

指図証券説は貨幣の価値をその機能と希少性から説いており、貨幣を構成する素材とは全く

26) [17]p.275 邦訳(上) 443頁

27) [17]p.286 邦訳(上) 459頁

28) [17] p.283, 邦訳(上) 455頁

29) [18] p.63, 邦訳(上) 122頁

30) [20] p.43 邦訳21頁

31) [20] p.47 邦訳26頁

「人びとが貨幣を法秩序の被造物と規定し、貨幣の市場通用力を国家の受領命令によって説明しようとすることによって、すでになんらかのものを獲得し、脱落した商品学説に取って代わったと信ずることも誤りである。」

32) [18]p.66 邦訳(上) 126頁

33) [20]p.53, 邦訳34頁

関係がない。したがって貨幣はたとえ価値ある素材を持っている場合でも財貨ではない。素材が貨幣である限り、それはいかなる欲望をも充足せず、主観的価値評価の対象とならず、したがって貨幣としての自己評価を持ち得ない。それゆえに経済主体の貨幣及び商品に対する主観的価値評価から、貨幣価値を導出しようとする説明方法は指図証券説には全く閉ざされていることになり、貨幣の価値は購買力であるとするシュンペーターの貨幣論の礎石がここに誕生することになるのである。

さらに1917年の論文「社会生産物と計算貨幣」では貨幣概念の範囲を定め、細かく分類し、貨幣として理解するものは以下の六つの要素であるとしている。事実上貨幣として流通している商品。貨幣素材の市場価格よりも、それから作られた貨幣単位の購買力のほうが高い貨幣。

銀行券。小切手 - および振替勘定。所得支出であって相殺のみによって決済される支払総額。事実上貨幣の役割を果たすあらゆる種類の信用手段と請求権<sup>34)</sup>。

ここで彼が考える貨幣は全て交換手段機能を果たすものである。貨幣の価値保蔵機能を考慮すると、貨幣の必然性にかんするシュンペーターのロジックに従えば、全ての商品が貨幣とみなされてしまうので貨幣本来の機能の概念には価値保蔵機能は組み込まれていない。

さらにこの分類のなかでも「銀行貨幣」の数量の変化のみが、実物経済に対して積極的な影響力を持つことに注目し、次のように述べている。

「銀行貨幣が紙幣から区別されるのは、購買力に対する直接的作用に関してではなく、銀行貨幣によってもたらされる価格上昇が生産に役立つ強制貯蓄を引き起こすのに対して、紙幣によってもたらされる価格上昇が消費に役立つ強制貯蓄を引き起こすことによるのみ

であることを考察した。<sup>35)</sup>」

この問題は『発展』では「信用インフレーション」「信用デフレーション」として説明される。つまり銀行貨幣の増加は他の紙幣の増加と異なり、追加的信用の創造と考えられているのである。ここで追加的信用と呼ばれるものは、「信用という建造物は現存の貨幣的基礎をこえるばかりでなく、現存の財貨的基礎をもこえるのである。」<sup>36)</sup>とシュンペーターが表現しているように、財貨に対応しない余分な追加的購買力のことを指す。したがって銀行貨幣の特質は、それが貨幣生産であり、景気変動と経済発展との原動力になっているところに求められると言うことができるであろう。このことは逆に考えれば、次章で論じることになる「発展における貨幣」の機能を果たしうるのは銀行貨幣のみに限定されたことを意味しているのである。

貨幣のもう一つの側面であり、『発展』の中心的論点となる信用現象が、貨幣概念の一部ではない「銀行貨幣」に集約されてしまったことは、シュンペーターの「動態における貨幣」の把握に大きな障害をもたらすことになったのではなかろうか。また、アーリーが指摘するようにシュンペーターは信用現象に注目し広義の流動性を把握しようとしてつとめながらも、結局は狭い範囲での金融資産、すなわち銀行預金の通貨化しか把握できなかった背景には、出発点である理論フレームワークすなわち静態経済における貨幣の機能を交換手段機能のみに求めてしまったことが大きく作用していると考えられる。

### 3. 経済循環における貨幣

シュンペーターの経済発展の理論の出発点である静態経済は『発展』第1章「一定条件に制約された経済の循環」に描かれている。その基

34) [20]p.57 ~ 62 邦訳 40 ~ 46頁

35) [20]p.116 邦訳 119頁

36) [18]p.147 邦訳(上) 263頁



礎にはワルラス的な一般均衡理論が想定されており、そこでは経済主体は長い間の経験をもとに経済行為を営み、各人は各経済期間において前期に生産された財貨によって生活する<sup>37)</sup>。したがって循環とは、支出、生産、消費が均衡している静態的な経済形態（単純再生産）を意味している。ここで最終的に問題となるのは生産的用役（土地用役と労働用役）と消費財の交換であるが、両者は完全に均衡しているため余分な生産手段、消費財は存在しない。また経験にしたがって行動する経済主体にとっては将来の予測の必要がなく、時間の経過は本質的な意味を持ち得ない。このような経済をシュンペーターは、発展の可能性を含んでいない「与えられた条件を基礎として最大の欲望満足を求めるつねに同一の経済行為」<sup>38)</sup>と表現し、与件が変化してもそれに順応するだけであって、人口増加も事物の本質を変化させるものではないとしている<sup>39)</sup>。

シュンペーターの考える静態経済は人口増加、時間の概念を含む広い範囲の概念であるが、静態的な状態はあくまでも理論的に精密化されたモデルであり、これだけでは全ての基本的な経済現象を把握しきれないとするのがシュンペーターの一貫した主張である。特に信用現象については循環、すなわち静態経済では理解することができないことを強調している<sup>40)</sup>。

シュンペーターにおける静態経済とは純粋理論であり、現実の経済への接近とは対立するものである。したがって循環の理論はフレームワークと密接な関係を持っており、循環における貨幣の機能はケネー＝ワルラス体系と同じく外生的なものとして捉えられている<sup>41)</sup>。つまり、

全ての貨幣は何らかの財貨に対応しており、財貨の裏付けを持たないような余分な貨幣は存在しないのである<sup>42)</sup>。またこのような循環経済においては、信用取引が本質的な意味を持つことはなく、貨幣と信用の区別は必要ないばかりか信用取引の必然性すらもないということをシュンペーターは強調する<sup>43)</sup>。

つまり循環経済、すなわち純粋経済理論の立場で考察するかぎりには、貨幣と信用を同一視しても問題は生じないとするのがシュンペーターの主張であり、信用現象は経済発展過程においてはじめて本質的な意味を持つと同時に、貨幣との区別がなされるものであると考えていることが分かる。

さらにシュンペーターの貨幣観として注目したいのは、貨幣が貨幣として機能するためには常に流過程になければならないと考えていた点である<sup>44)</sup>。つまり、ここでシュンペーターが示している「貨幣の性質」とは、明らかに交換の仲介機能のことであり、流過程にある貨幣のみがシュンペーターの貨幣の範疇に収められ、それ以外の貨幣（退蔵貨幣）は考慮されていない。退蔵貨幣を貨幣概念から除外するにあたって、シュンペーターは次のように述べている。

「貨幣需要はもう一つ別の意味を持っている。すなわち、それは貨幣の在る高あるいは現金残高を保有しようとの希望を意味するだろう。所望の現金（*encaisse desirée*）というこのワルラスの観念...（略）...は、この偉大なフランス人の強大な構造の中でのもっとも価値少ない要素の一つである。それは定常状態の分析の中だけで無害なものである。もっともそこでさえもそれは事実の誤った表現を意味し

37) [18]p.5～6 邦訳（上）31～33頁

38) [18]p.75 邦訳（上）140頁

39) [18]p.121, 邦訳（上）218頁

40) [17]p.619, 邦訳（下）486頁

41) [18]p.66, 邦訳（上）125頁

42) [18]p.72 邦訳（上）136頁

43) [18]p.70, 邦訳（上）132頁

44) [20]p.67, 邦訳54頁

てはいるが。<sup>45)</sup>」

ここでシュンペーターは退蔵貨幣の例として、ある経済主体が所得を受け取り支出するまでの期間、手許に滞留する貨幣を挙げている。循環におけるこのような退蔵貨幣は制度的な取り決めに基づき、現金保有への欲望が作用しているわけではないとシュンペーターは考える。したがって循環における退蔵貨幣は分析の障壁になるものではないが、「定常の場合をはなれるなら、この観念は誤りにみちびくものとなる。」<sup>46)</sup>と強調する。なぜならば、経済主体がある財貨（例えばパン）への欲望を示すことはその行為自体が意味をもつが、「もしだれかが現金保有の欲望を示すなら、これはもともと全くなにも意味しない。<sup>47)</sup>」と考えるからである。この二つの行為の違いはどこにあるのだろうか。シュンペーターの考える貨幣は財貨を手に入れるための手段にすぎず、目的としての財貨に対応していない貨幣（手許に滞留している退蔵貨幣）それ自体を保有したいと欲することは、財貨を欲する行為とは区別され、本質的な意味を持ちえないと結論づけられるのである。しかしながら、第3章3節において見るように、退蔵貨幣を考慮しないシュンペーターの貨幣観は、信用や資本の概念に制約を加えることになり、動態における貨幣機能の把握を困難にする要因になったのではないかと考えられる。

## 第2章 シュンペーターの信用理論

### 1. 経済発展における貨幣

循環と発展、静態と動態の二組の対比はシュンペーターの理論においては「純粋理論」と

「現実への接近」の対比という側面も持っている。しかし『本質』におけるシュンペーターの姿勢や『発展』における静態経済の取り扱いを見れば、シュンペーターは経済静学の理論的な本質を厳密に保持しながら、しかも現実との距離を極限にまで縮めようと努力していたとみることができるであろう<sup>48)</sup>。その努力の過程でシュンペーターが注目した現象こそ、現実の貨幣・金融問題だったのであり、循環経済から発展へ移行する原動力としての信用をめぐる問題だったのではなからうか。

シュンペーターは信用創造によって増加する貨幣数量が実物経済に対して与える影響を観察し、理論化しようとした。その結果、フレームワークとしての静態経済における外生的な貨幣とは別の側面、つまり内生的な貨幣観を提示する必要があったのである。

『発展』第3章「信用と資本」において次のような貨幣観を提起している。

「第一の異説はこの場合（発展……筆者）に貨幣に対して本質的な役割を認めるものであり、第二の異説は他の支払手段に対しても本質的な役割を認め、したがって支払手段の領域における経過は、あらゆる主要な事柄が発生するはずの財貨の世界における経過の単なる反映ではないというのである。<sup>49)</sup>」

第二の異説は貨幣が商品でないために、商品への請求権と貨幣への請求権はその性質が本質的に異なることを意味しており、シュンペーターは次のような具体例を挙げ説明している。

「私は馬に対する請求権の上ののって駆けることはできないが、貨幣に対する請求権でものを購入することができる。<sup>50)</sup>」

この文章は、貨幣に対する請求権が貨幣と同じ機能を果たすとみているのだが、ここでシュ

45) [22]p.547 邦訳 ( ) 812頁

46) [22]p.547 邦訳 ( ) 812頁

47) [22]p.547 邦訳 ( ) 812頁

48) 杉本[52]では、このような立場から、静学におけるシュンペーターの功績は高く評価されている。

49) [18]p.140 邦訳(上) 251頁

50) [18]p.142 邦訳(上) 256頁

ンペーターが想定している貨幣の機能とは支払手段機能のことである。支払手段としての貨幣の機能は、前章で述べた循環における貨幣の機能である交換手段機能とは区別される。交換の補助手段としての貨幣は、物々交換経済における  $W - G - W$  の  $G$  にあたるものであり、循環経済において強調される貨幣機能である。しかし支払手段としての機能は、循環においても発展においても貨幣が充たすべきものであるとシュンペーターは考えており、最も重要な貨幣の機能と見ているのである<sup>51)</sup>。

貨幣が支払手段として機能することは、循環においても発展においても同じである。では「循環における貨幣」と「発展における貨幣」の違いはどのような点にあるのだろうか。シュンペーターは両者を区別する点は、財貨（社会的生産物 = 商品）との対応関係にあると考えている<sup>52)</sup>。

つまり「発展における貨幣」はそれが流通する際、いまだ存在していない財貨に対する証明書のような働きをするのであり、現存する財貨には全く対応していない。このような財貨の裏付けを持たない貨幣は発展の過程において初めて観察される現象であり、この点で循環における貨幣とは区別されるのである。次節ではいかにしてこのような「発展における貨幣」が発生するのか、またシュンペーターの意味する「発展における貨幣」とは具体的にはなにを指しているのかを考察する。

## 2. 発展における信用

シュンペーターが現実への接近として理論に導入した発展の過程は、均衡状態の推移として捉えられ、循環と区別される<sup>53)</sup>。

さらにこれら全ての変化を発展と呼ぶのではなく、「第一に経済から自発的に生まれた変化、第二に非連続的な変化<sup>54)</sup>」でなければならないとしている。これらの条件を満たす特殊な現象こそが、それまでの静態理論では説明し得ないわれわれの議論の対象である。

シュンペーターは発展過程の理論的分析に際しても、フレームワークである循環経済から出発する。そしてこの循環経済が企業者による「新結合」によって創造的に破壊されることで経済発展が開始されるのであるが、このとき企業者は新結合遂行のための財源をいかにして確保するのかが問題となる。循環経済から理論を出発させることで、企業者の財源は発展目的のための（しかもこの目的のためだけの）特別な調達方法を求めなければならないことが強調される。なぜならば、生産手段購入財源に対する伝統的な答えは「国民経済の貯蓄の年々の増加およびその年々解放される部分<sup>55)</sup>」から企業者の財源を賄うと考えられるが、シュンペーターの循環経済においてはこの道は閉ざされている。もし何らかの貯蓄によって新結合が遂行されるのであれば、それは「さきだつ利潤、したがってまたさきだつ発展の波を前提するものであり、したがって、論理的な要点を示すべき模型のいわば一階に置かれる資格をもつものではない<sup>56)</sup>」のである。シュンペーターが分析しようとするのは、無発展の状態から初めて発展が起ころうとしている過程であるため、新結合は既存の結合と違ってすでに流通している貨幣、または貨幣代替物によって賄うことはできない。

そこで企業者は、循環における財貨と何の対応関係もない追加的な貨幣あるいは貨幣代替物への信用を求め、生産手段を購入しなければならない。それこそがシュンペーターが強調する

51) [25]p.37

52) [18]p.110 邦訳(上) 197頁

53) [18]p.98 邦訳(上) 178頁

54) [18]p.99 邦訳(上) 179頁

55) [18]p.107 邦訳(上) 193頁

56) [22]p.110 邦訳( ) 160頁

発展目的のためだけの特別な方法であり、銀行による信用創造なのである。

「まさにこれこそが新結合の遂行のための典型的な金融の源泉であり、しかも過去の発展の結果が事実上いかなる場合にも存在しないときには、ほとんど唯一の金融源泉となるのである。<sup>57)</sup>」

「発展における貨幣」は企業者による生産手段の購入を目的として、銀行による信用創造を介して発生するのである。しかも、シュンペーターのモデルにおいては銀行は企業者にとって唯一の金融の源泉であるとされるので、「発展における貨幣」とは銀行貨幣 = 信用貨幣のみを指していることになる。

さらに信用と新結合との関係を、シュンペーターは次のように述べている。

「まず第一に信用はなによりもこのため（新結合の遂行……筆者）に必要であること、第二に信用はこのような必要からさらに進んで「経常的」な経営活動にまで入り込んでいることは……理論的にも歴史的にも明らかである。<sup>58)</sup>」

このようにシュンペーターにおける信用は、企業者に対してファイナンスされるための信用に限られているのであり、これは信用の資本としての認識を示している。

また、第2点として指摘される信用と新結合の関係であるが、「経常的」な経済循環に定着できるのは銀行信用（信用創造をともなう貸出）のみであると述べ、その過程で信用インフレーション、信用デフレーションのメカニズムを紹介している<sup>59)</sup>。ここでも銀行貨幣、銀行信用は他から区別される特殊な性質を付与されている。シュンペーターの理論では、信用現象は経済発展と密接不可分な関係にあってこそ、はじめて

本質的な意義を認められ、したがって、交換の補助手段としての貨幣と区別される。つまり信用創造によって生じる貨幣の増加は、企業者による新結合の遂行を可能にし、生産構造を積極的に揺り動かすことになる。この意味で信用創造による貨幣量の変化は実物経済に対して中立的ではなく、それに影響を及ぼすのである<sup>60)</sup>。

さらにいえば、シュンペーターは「発展における信用」と「循環における信用」を区別しているが、この区別は発展過程における信用と貨幣の区別をも意味していると考えられる。循環における信用はすでに見たように、過去の財の流れに対する「参加証」であるから金属貨幣と同じであると考えられ、シュンペーターは「正常な信用」と表現している。「発展における信用」は将来の用役、これから生産されるべき財貨についての証明証であり、信用が供与される時点では現存の財貨に対応していない点で金属貨幣とは異なるため「異常な信用」と表現される<sup>62)</sup>。ここではどちらも「信用」とされながら、正常な信用は「循環における貨幣」と同等とみなされることから、シュンペーターが信用現象として直視していたのは「異常な信用」に他ならない。つまりシュンペーターの信用問題へのカギは、循環と発展の明確な区別にあるということができよう。

また、循環と発展の二つの異なる経済形態を包含するシュンペーターの理論構成においても、信用は決定的な役割を担っている。そのことをシュンペーターは信用現象の核心として次のように述べている。

「この意味（発展……筆者）における信用供与は、経済を企業者の目的に服従させる命令、彼が必要とする財貨に対する指図、彼に対す

57) [18]p.109 邦訳(上)196頁

58) [18]p.105 邦訳(上)189頁

59) [18]p.161 邦訳(上)285頁

「以上（信用インフレーション、信用デフレーション）が、銀行信用が循環過程にも浸透し、そこに定着するにいたる最も重要な道程である。」（括弧内は筆者。）60) [18]p.99 邦訳(上)179頁

60) [18]p.152, 邦訳(上)272頁

62) [18]p.147 邦訳(上)263頁

る生産力の委託という働きをする。このようにして初めて経済発展が遂行され、単なる循環の域を脱するのである。<sup>63)</sup>

以上のように経済発展と信用創造の関係をみると、この背後には銀行の役割の新しい形態への鋭い認識が存在しているのである。さらに発展における貨幣を銀行貨幣すなわち銀行信用に絞り、その機能を強調していることから、銀行貨幣の「生産者」である「銀行」が経済発展の主要なポジションを握っていることは明白であろう。

『発展』では銀行家の役割を「購買力」という商品の仲介商人であるのではなく、なによりもその生産者であることを強調し、『発展』第2版（1926年）では、さらに彼こそが唯一の資本家であるとさえ述べられている<sup>64)</sup>。

シュンペーターのヴィジョンにおける信用制度とは、あくまでも銀行を中心としたものであり、銀行の特殊な機能を考慮することなしに彼の信用理論、経済理論に接近することは不可能であろう。その意義の重要性は、以下の引用においていっそう明らかである。

「このようにして銀行界のうちに国民経済の中央当局が創設され、その指示は生産的有機体における新しい者に必要な生産手段を与える。貨幣的過程、すなわち単に「指図証券」にしすぎず「証明書」ではない貨幣の創造と、この結果である価格の上昇とは経済発展の強力な槓桿となる。このような貨幣の創造のうち近代信用の本質が存在する。<sup>65)</sup>

シュンペーターのヴィジョンには「新結合遂行のための信用を生産する機関」としての特殊な銀行像が初期の段階から明確に描かれている。

そして資本主義的信用組織は、このような機能を果たす銀行を中心に発達してきたものであると捉えられているのである<sup>66)</sup>。

シュンペーターの想定する銀行は、20世紀初頭（シュンペーターが大蔵大臣を務めた頃）における高利貸的性格の強いオーストリアの銀行でもなく、産業を支配し政治への多大な影響力を持つドイツの銀行でもない。イギリスの商業銀行に見られるような長期貸付を行わない銀行や、アメリカのような株式市場中心の長期資金調達方法でもないのである。いうなればシュンペーターの銀行とは、理念としての銀行であったということができるであろう。したがって、このようなシュンペーターの描いた銀行業のイメージは体系全体の働き、銀行家個人の資質ともに極めて高い水準に想定されていることを認めており、時代と国によっては銀行業者が全体的に水準に達しないことがあると述べている。但しこのような場合、「向こう見ずな銀行業がこれに付随してまた向こう見ずな銀行理論が発展する。このこと自体…（省略）…資本主義発展史を転じて、破滅史たらしめるに充分である。<sup>67)</sup>」と、現代においても耳を傾けられるべき警告をしており、資本主義の発展を支える銀行業の整備の重要性を強調しているのである。

さらにもう一点、資本主義機構のはたらきにとって重要であると強調しているのは、銀行が独立の因子でなければならないということである。銀行業は企業から独立しているのみならず、政治からも独立していなければ、銀行組織を麻痺させることになるであろうと注意を促している。シュンペーターにとっての銀行のイメージ、

63) [18]p.147 邦訳（上）273頁

64) [18]p.110 邦訳（上）197頁

65) [20]p.109 邦訳 110頁

66) [18]p.106 邦訳（上）190頁

「資本主義的信用組織は事実上新結合に対する資金の供給から発達し、それに基づいて発達したものである。国によってそれぞれ特殊な仕方ではあったであろうが、すべての国においてそうであり、ことに特徴のあるのはドイツの中流銀行および巨大銀行の成立である。」

67) [22]p.117 邦訳（ ）171頁

その独立性は次の一句に象徴的に表現されている。すなわち、

「銀行業者はこの点では（独立の因子であること）経済学者と同じであって、政府や政治家や一般大衆にまるで人気のない場合にだけ一人前なのである。<sup>68)</sup>」（括弧内は筆者。）

### 第3章 二つの異なる経済形態における貨幣と信用

#### 1. 「循環における貨幣」と「発展における貨幣」

静態的な経済理論（循環）の上に動態的な経済理論（発展）の構築を試みる理論構成はシュンペーター理論の大きな特徴であると同時に、両者を明確に区別して分析していくことが、したがって解釈と評価への重要な足がかりとなる。本論文で扱う貨幣と信用の問題においてはこの区別が特に重要な意味を持ち、理解への重要なカギになると考えられる。

そこでここではまず第1章、第2章で見てきた「循環における貨幣」と「発展における貨幣」はなにを意味しているのかを考察してみたい。

シュンペーターの基本理論フレームワークである循環に関する記述は第1章で見たとおりである。貨幣は交換の補助手段にすぎず、商品の流通を媒介するヴェールにすぎない。したがってこのような経済形態は産業資本の循環過程を生産資本の循環、すなわち生産の連続性の側面から観察しているといつてよいであろう。このような分析方法をシュンペーターは「実物的分析」と呼び、「貨幣的分析」と区別して次のように述べている。

「実物的分析（Real Analysis）は、経済生活のあらゆる本質的現象が、財貨とサービス、これらについての決定、ならびにこれらの相互間の関係というタームで叙述されうとの

原理から出発するものである。貨幣は、取引を容易にするために用いられた技術的用具に他ならないという控えめな役割をもって、この画面のなかに入り込むにすぎない。<sup>69)</sup>」

見られるように、循環における記述は、すべて実物的分析で行われているのである。そこでマルクスに倣って、実物的分析の立場から資本の循環形式を表すと、 $P \dots W' \cdot G' \cdot G \cdot W \{A, Pm\} \dots P$ となるが、この形式における流通は  $W - G - W$  の単純な商品流通である。ここでの貨幣は「循環における貨幣」に関するシュンペーターの記述と同様に、商品の流通を技術的に補助するものに他ならず、貨幣に対して本質的な役割は認められていない。また第1章3節で述べたように、循環において信用取引はシュンペーターの意味するような本質的な意味を持つことはなく、貨幣と信用の区別も存在せず、ここでは信用取引も金属貨幣と同じ役割を果たすにすぎないとされている。

この問題を上の生産資本の循環形式に照らして考えてみると、信用取引は生産活動の継続に決定的な価値実現局面  $W' \cdot G' \cdot G$  に現れるのだが、ここでの信用の機能は信用支払手段が貨幣にかわって決済を行っていることにあると考えられる。したがって、この形式における信用は債権債務関係を振り替え、相殺するような決済機能を果たしているのであって、これは信用貨幣の生成につながる側面であるといえよう。このようにシュンペーターが循環において信用と貨幣になんら本質的な違いがないというとき、あるいは正常な信用と表現するものは、債権債務関係を相殺するための貨幣代替物としての信用を意味しているのである。

では、経済発展過程の場合はどのように表されるであろうか。シュンペーターは実物的分析だけでは現実の経済過程を把握できないことと、それに代わる貨幣的分析の重要性を次のよう述

68) [22]p.118 邦訳( )172頁

69) [23]p.277 邦訳第2巻579頁

べている。

「われわれは、一步一步と、実物的分析に入り込む貨幣的要素を認めるとともに、貨幣がおよそなんらかの有意義な意味において、一度でも中立的でありえたであろうかということに疑問とするに至るのである。ついで第二に、貨幣的分析は、貨幣の要素をわれわれの分析的構造のいわば基盤に導入し、経済生活のあらゆる本質的特質が物々交換経済のモデルで代表されうるとなす考え方を放棄させるものである。<sup>70)</sup>」

シュンペーターによる発展過程の分析はまさに貨幣的分析なのであり、発展過程においては経済を産業資本の循環とは独立した貨幣資本の循環から眺めていると考えることができるのではなかろうか。

このことは貨幣資本の循環式  $G - W \{ A, P, m \} \dots P \dots W' - G'$  を念頭に置くと理解しやすくなる。この形態は全てを貨幣形態で見えており、したがって貨幣や信用の役割が大きくなっている。 $W \{ A, P, m \}$  は投資をあらわしており、シュンペーターの理論においては新結合を意味する。したがって信用は投資 ( $W \{ A, P, m \}$ ) の直前に現れるのだが、ここでの信用は「新結合遂行のための金融源泉」としての信用創造を伴うものであり、まさしくシュンペーターが「発展における信用」、「異常な信用」と表現した現象である。このような信用はファイナンス（資本調達とその前提ないし随伴物としての擬制資本形態を介した諸金融資産取引）としての側面を担っていることになる。つまり、この形態において信用は資本としての一面を捉えられているのである。

このように循環と発展を明確に区別し、実物的分析と貨幣的分析の二つの異なる分析方法を用いることで、シュンペーターは信用のもつ二

つの異なる側面を観察していることが分かる。信用はある一面では貨幣であるし、またある一面では資本としての側面も備えている。シュンペーターが「循環における貨幣」と「発展における貨幣」として区別しようとしたものは、この信用の二面性に関わる貨幣観だったとみてよいであろう。

にもかかわらず、シュンペーターにおいては、事柄は貨幣と信用の区別であるとされるのである。なぜならば、循環における信用は貨幣代替物として債権債務関係の相殺を行うものとして考えられ、これは貨幣と同じものとみなされる。さらにシュンペーターの信用概念は発展における信用に他ならず、理論上、膨大な固定資本投資をともなう新結合の遂行を目的にするような信用のみを信用と定義している。したがって信用の貨幣的側面は貨幣の範疇に入れられ、信用の資本的な側面は信用の範疇に収めることをもって、両者の区別がなされていると理解しうるのではなかろうか。

## 2. 「信用 = 貨幣 = 資本」の理論 信用創造理論との関係において

前節では、シュンペーターが貨幣と信用の区別を循環と発展、二つの異なるモデルにおいて顕在化させようとしたとの仮説を立て、考察してきた。実際、シュンペーターは明らかに通貨としての貨幣と信用とを区別しようとしていたと思われる記述を残しており、たとえば『景気循環論』では次のように述べている。

「『信用』が『貨幣代替物』として役立つとするのも全く正しくはない。<sup>71)</sup>」

また「貨幣で表示した信用創造の額」と表現していることから<sup>72)</sup>、貨幣量と信用量とを区別しようとしていたことが分かる。

70) [23]p.278 邦訳第2巻581頁

71) [22]p.545 邦訳( )808頁

72) [22]p.123 邦訳( )179頁

しかし「新しい信用理論」つまり信用創造論者の基本概念には、貨幣 = 信用または資本 = 信用と考える概念があり、マックロードやハーンは「信用 = 貨幣 = 資本」の立場を主張していたのである。シュンペーターの立場ははっきりしていないが、「信用 = 貨幣 = 資本」の基本的な概念は共有していたように考えられる。しかしシュンペーターの場合、全面的に貨幣、信用、資本を同一視することはなく、信用のもつ貨幣的側面と資本的側面として理解していたのではなからうか。それにも関わらず両者を明確に区別することができず、曖昧にしたまま叙述しているように見受けられるところもあり、この点にシュンペーターの貨幣・信用理論の特徴と限界があるのではないかと思われる。例えば次の引用は、信用が流通に際して現金と同様の機能を果たすと述べているのだが、この信用が貨幣的な側面として捉えられているのか、資本的な側面として捉えられているのかははっきりと区別されていない。

「このような信用支払手段、すなわち信用供与の目的および行為によって創造される支払手段は、流通にさいして現金と同様の役割をする。<sup>73)</sup>」

この問題は次節で取り上げるため、この節ではまず「信用 = 貨幣」の理論の基本概念をみて、シュンペーターの記述と関連させながらこの理論の問題点を考察する。次に同じように「信用 = 資本」の理論についても考察を加えていきたい。

「信用 = 貨幣」説を簡潔に表現している文章をマックロードから引用する。

「信用はその性質において、またその効果において、あらゆる点で貨幣に等しく、信用の創造は貨幣の追加に他ならず、信用と貨幣を区別するものはなにもない。<sup>74)</sup>」

この説の基本概念は貨幣の機能を交換手段と

見るところにある。「新しい信用理論」に共通の前提として、銀行の信用創造が現金の引き出しによってではなく、預金の貸方記入や小切手などの支払い指図証券によって行われる組織を想定しており、これらの信用支払手段は交換手段として機能する限り貨幣と同一視される。さらにシュンペーターの考え方と同様に、貨幣あるいは信用支払手段は交換の補助手段であると同時に、支払手段としての機能を果たすと考えられているのである。

確かに信用は一定の条件のもとでは支払手段としての貨幣機能の一部を代替することができる。しかしここで注意しなければならないのは、信用は貨幣として機能しているのではなく、貨幣代替物（信用貨幣）として機能している点である。本来の貨幣と貨幣代替物は全く同一ではない。なぜならば、貨幣請求権なるものは、請求対象となる別個の貨幣なる存在を理論的前提にしているものだからである。しかも先ほど「一定の条件のもとでは」信用は貨幣と同様の役割を果たすと述べたが、この一定の条件とは債権債務関係の発生、移転、相殺のことであり、この関係を背景に持つことなしに信用支払手段が流通することはできない。本来の貨幣は債権債務関係との関わりを持つことなくその機能を果たしうる点で両者は本質的に異なるのであり、信用と（本来の）貨幣とを同一視する「信用 = 貨幣」説のロジックは、貨幣請求権と貨幣との間にある本質的な相違を見逃すものであるといわねばならない。

ところが、シュンペーターは貨幣と貨幣請求権の関係を「発展における貨幣」との関連で次のように述べる。

「支払手段は経済の中で創造され、たしかに外形においては単に「貨幣」に対する請求権を示すものにすぎないが、しかし他の財貨に対する請求権とは次の点においてまったく

73) [18]p.109 邦訳(上) 196頁

74) [11]p.73 邦訳は筆者。



本質的に区別されるべきものである。すなわち、それはあらゆる場合に少なくとも一時的に指定された財貨〔貨幣〕とまったく同一の役割を果たすのであって、ある条件のもとではその財貨〔貨幣〕に代替しうるからである。<sup>75)</sup>」

この引用からは、シュンペーター理論においてはマックロードの「貨幣＝信用」説に見られるような、本来の貨幣と貨幣請求権の同一視は見られない。なぜならば、シュンペーターは貨幣と貨幣への請求権が「ある条件の下」でなければ同一の役割を果たしえないことを認識しており、両者を区別しているからである。ここで述べられている、貨幣と貨幣請求権に同一の機能とは支払手段機能のことであり、「ある条件」とは先ほど述べた債権債務関係の発生、移転、相殺に他ならない。つまりシュンペーターは全面的に貨幣と信用が等しいとするのではなく、債権債務関係をベースにしているときにのみ、支払手段としての貨幣の機能を信用が代替しうることを理解していたのではないかと考えられる。さらに支払手段としての信用は信用の機能の一つにすぎないこと、しかもそれは債権債務関係を前提にしなければならない点で、本来の貨幣とは本質的に異なることを認識した上で、議論が展開されていると考えられるのである。

つまり、シュンペーターは信用の持つ貨幣的な側面（債権債務関係をベースに支払手段として貨幣の代替をする機能）に注目する際には「信用＝貨幣」説を共有しているが、完全に貨幣と信用が等しいとは理解しておらず、貨幣的な側面からは説明できない信用のもう一つの側面、すなわち信用の資本的側面も把握していたといえるであろう。

次に「信用＝資本」説を見てみよう。この理

論はワグナーによって「信用の資本理論」(die Kapitaltheorie des Kredits)と名付けられ、信用創造論者に特徴的な概念であるとされている<sup>76)</sup>。ここでもマックロードの主張を引用する。

「われわれは利潤をもたらすものは、いかなるものであっても資本であることを見てきた。したがって、銀行信用が貨幣と同じ利潤をもたらす限り、貨幣が銀行にとって資本であるのと同様に、信用が銀行にとって資本であるということは明らかである。<sup>77)</sup>」

マックロードによれば利潤をもたらしうるものはすべて資本なのであるから、銀行が銀行券の発行もしくは当座勘定の創設によって利潤を得るときは、創造された信用は非物財的資本とみなされるのである。ここで現実の財貨ではない貨幣的概念を資本として捉えたことが、「信用＝資本」説の基本特徴となる。

シュンペーターは次のように資本を定義している。

「資本とは、企業者が彼の必要とする具体的財貨を自分の支配下におくことができるようにする梃子にほかならず、また新しい目的のために財貨を処分する手段、あるいは生産に新しい方向を指令する手段にほかならない。<sup>78)</sup>」

この引用からも明かなように、具体的財貨と資本ははっきりと区別されており、資本の大きさは貨幣的概念である購買力で表されることになる。したがって資本は「購買力の基金」と定義され<sup>79)</sup>、シュンペーターはその概念が貨幣的なものであり財貨の世界と対峙していることを次のように主張している。

「一企業の資本とはその目的に役立つあらゆる財貨の総体でもない。なぜなら、資本は財貨の世界と対峙しているからである。資本によって財貨が購入される」「資本が財貨

75) [18]p.142 邦訳(上) 255頁

76) [36]p.149

77) [11]p.376 邦訳は筆者。

78) [18]p.165 邦訳(上) 291頁

79) [18]p.170 邦訳(上) 298頁

に投入される」のであって、まさにこの点に、資本の機能は獲得された財貨の機能と異なるという認識が横たわっている。<sup>80)</sup>

このように、シュンペーターの資本は貨幣的概念であるため、物財的資本と非物財的資本の区別は存在しない。すべての資本は貨幣資本の形態で捉えられる。また、シュンペーターの資本は新結合の遂行と密接な関係を持っており、「資本は発展の一概念であって、循環にはこれに対応するものがない<sup>81)</sup>」ことを次のように述べている。

「もしある支払手段が企業者に生産手段を調達したり、この目的のためにこれらを既存の用途から引き抜くことに役立たないとすれば、それは資本ではない。したがって発展のない経済においては「資本」は存在しない。<sup>82)</sup>

このように、新結合の遂行を可能にするための生産手段購入に必要な購買力のみを資本として捉えるため、当然のことながら資本概念と信用概念は密接な関係を持つことになる。シュンペーターが資本について次のように述べる時、明らかに資本と信用は同一視されていると考えられるであろう。

「支払手段のみが資本であるが、それは単に「貨幣」だけではなく、どんな種類のものであれ流通手段一般を指している。ただしすべての支払手段が資本であるのではなく、ここでわれわれが問題としている特有の機能（新結合の遂行を可能にするための生産手段を購入するための基金としての機能……筆者）を事実上みだしている支払手段に限られる。<sup>83)</sup>」

資本となりうる支払手段とは、銀行によって創造された「発展における信用」に他ならない。したがって「発展における信用」は信用であると同時に資本としての一面も併せ持っている。

さらに「信用＝資本」と捉えると、銀行は信用創造によって資本をも創造していることになる。つまり、発展における銀行は資本的側面としての信用を創造しているのであり、前節で述べた支払手段機能を果たす貨幣代替物としての信用とは明らかに区別されるべき信用の性質を捉えていると考えられる。

しかしこのようなシュンペーターの資本概念は一面的であり、新結合の遂行と関係を持つ貨幣資本しか資本概念の範疇に含めないことから、その概念は妥当範囲の狭いものであることは否定できない。シュンペーターは資本と信用を同一視しているので、貨幣資本の形成についても銀行による信用創造の占める役割を過大視せざるをえないのである。この問題は次章で議論する退蔵貨幣との関係でさらに検討されるであろう。

要するに、シュンペーターは全面的に「信用＝貨幣＝資本」と捉えているのではないことが分かった。循環と発展、どちらの経済形態におかれるかによって、信用の二面性（貨幣的側面と資本的側面）の一方が強調されているのである。

### 3. 信用概念の未整備 貨幣論の完成をめぐる

シュンペーターは信用の二つの側面である、貨幣的側面と資本的側面を循環と発展の対立する二つの経済形態の中で区別することを意図していた。そしてこの区別は同時に、貨幣システムと信用システムを、若干の混乱を含みながらも、区別しようとするものであった。信用現象を把握し、理論化することは貨幣の動態化と直接的な関係を持つ。この問題はシュンペーターの貨幣論の永遠のテーマでもあった。

80) [18]p.167 邦訳(上) 294頁

81) [18]p.173 邦訳(上) 303頁

82) [18]p.172 邦訳(上) 302頁

83) [18]p.172 邦訳(上) 302頁

ここでは貨幣の動態化の失敗を信用概念の二側面の混同、すなわち貨幣と信用の混同にその原因を求め、シュンペーターの貨幣・信用理論が抱える問題点をさらに明らかにしていきたい。

シュンペーターの基本的な貨幣観は、理論フレームワークと関連して貨幣交換手段機能とみることにある。したがって、流過程になれば貨幣としての機能を果たすことはなく、貨幣としての性質も失うと考えていたことは第1章において見たとおりである<sup>84)</sup>。しかし循環から発展の局面へ移行する際、銀行によって新たに創出される貨幣は「発展における貨幣」として、交換手段機能以上の本質的な役割を担うとされ両者は次のように明確に区別されていた。

「これ（銀行による信用創造……筆者）が経済的進歩を達成するためのすぐれて資本主義的方法である。貨幣創造のうちに貨幣の単なる流通経済的機能と異なる、貨幣の資本主義的機能が現れている。<sup>85)</sup>」

銀行による信用創造は資本主義に特有な方法であり、そこには「循環における貨幣」とは本質的に異なる「貨幣の資本主義的機能」と表現される経済発展の原動力となる機能が付与されている。

ところが、次の二つの引用では信用支払手段（Kreditzahlungsmittel）が流過程に流出すると「循環における貨幣」（＝通貨）通貨と同様の機能を果たすとされるのである。

「このような信用支払手段、すなわち信用供与の目的および行為によって創造される支払手段は、流通にさいして現金と同様の役割をする。<sup>86)</sup>」

「既存の貨幣とも代替されず、すでに生産された商品にも基づかない手形も、もしそれが流通する場合には、（現金と……筆者）同様の性質を持つのである。<sup>87)</sup>」

シュンペーターの理論における信用概念は、企業者による新結合の遂行を可能にするための資金源としての資本的な側面を持つ信用に限られているのは、第2章で見てきたとおりである。そして信用創造によって増加した貨幣は発展過程において実物経済に積極的な刺激を与えると考えられるのだが、上の引用文では、シュンペーターは銀行の手許にある間は信用創造、購買力の増加であると認識していながら、ひとたび流過程にでた信用を通貨（交換の補助手段としての貨幣）と混同してしまう。ここで信用と通貨を混同することが問題になるのは次のような理由からである。本来、シュンペーターは、発展過程において貨幣や信用が実物経済に対して本質的な役割を果たしていると考えたことで貨幣の動態的な側面を捉えようとするのだが、このように「流過程」の中で貨幣や信用を考えるのは貨幣の商品流通媒介機能に注目した考え方であり、媒介機能を念頭に置いては実物経済に影響を及ぼすような貨幣の機能とは両立しがたくなってしま<sup>88)</sup>。

この問題は前節で述べた信用の二面性にも関係している。繰り返し述べているように、発展における信用は新結合のためにファイナンスされる資本としての信用である。したがって銀行で信用が創造されるときは資本として機能するべく発生していると考えられ、発生時点ではそれは債権債務関係を相殺する支払手段としての

84) 本論文13～14頁を参照のこと。

85) [20]p.109 邦訳 110頁

86) [18]p.109 邦訳（上）196頁

87) [18]p.157 邦訳（上）279頁

88) ケインズはどのようにこの困難を回避したか。

貨幣の機能を流動性の要求を満たすことと考えた。交換の仲介機能は信用制度の副産物としが考えていなかった。「計算貨幣(money of account)、すなわちそれによって債務や価格や一般的購買力を表示するものは、貨幣理論の本源的概念である。…(略)…ただ単に交換のその場でのその便宜的な媒介物として用いられるにすぎないものが、一般的購買力を保持する手段を表しているというがざりて、貨幣としての存在に近づくこともあるであろう。しかしもしそれだけにとどまるならば、われわれはほとんど物々交換の段階から脱してはいない。」[7]p.3 邦訳 3頁

信用とは区別されている。ところが、シュンペーターは理論的には資本的な側面を持った信用だけを取り上げようとしているにもかかわらず、現実の信用取引を観察するさい無視することができない信用の貨幣的側面をも取り込んでしまう。両者は同じ信用現象でありながら性質は全く異なるにもかかわらずである。しかも本来、資本として発生した信用がその流過程や、実物経済に対する作用方法を明確にされないままに、貨幣代替物としての信用にすり替えられてしまっているために、先の引用文に見られるような曖昧な表現がなされてしまう。シュンペーターが信用のもつ静態的な側面である貨幣代替物としての機能と、動態的な側面としての資本的側面を正確に使い分けていれば、動態における貨幣機能の把握の足がかりとなっていたかもしれないのである。なぜならば、貨幣代替物としての信用は流過程の中でのみ観察されても害はないが、信用が企業へファイナンスされる資本として機能する場合には、流過程にある信用だけでは実態経済への影響は説明できない。

次に、退蔵貨幣と貨幣資本との関係からシュンペーターの資本概念の問題点を見てみよう。次の引用は第1章において、シュンペーターの貨幣の機能を論じた際に引用した文章である。

「貨幣数量のうち多くの構成分子は、それが流通しないときには貨幣の性質を失う。そしてすべての貨幣は、それが最終的に流通から離脱し、貨幣以外の用途に向けられるときには、貨幣であることをやめる。<sup>89)</sup>」

ここで示されている貨幣の機能は交換手段機能であり、貨幣は流通しなければ貨幣として存在し得ないと述べている。そのため、シュンペーターは退蔵貨幣を分析の対象から除外する<sup>90)</sup>。シュンペーターのフレームワークとの関係を考えれば、これは当然の結論である。しかしシュ

ンペーターのここでの分析対象はフレームワークとは全く異なる動態的経済、すなわち発展の過程であり、そのために新たな貨幣観、信用概念、資本概念の提起を意図しているのである。そして貨幣が信用現象を通じていかにして実物経済に影響を及ぼすかを把握することが、貨幣論の完成につながる動態における貨幣分析の目標に他ならなかったはずなのである。

ところが退蔵貨幣を考慮に入れない貨幣観は、信用概念、資本概念にも影響を及ぼしており、動態において信用現象が果たす役割を広く把握することを困難にしていると考えられる。これはシュンペーターの想定する金融資産の範疇が、他の信用主義者に比べ狭いものであるとするアーリーによる批判とも直接的に関係してくるであろう。

シュンペーターの資本概念は前節において述べたように、貨幣的概念である購買力の基金として定義される。したがって資本は財貨の世界とは対峙するものと考えられ、物財的資本と非物財的資本の区別はなく、すべての資本は貨幣資本の形態で捉えられている。また資本となりうる支払手段は銀行によって創造された信用に他ならないことは、前節において見たとおりである。しかしこのように考えると、シュンペーターの貨幣資本概念の狭隘さは否定できない。

川合[46]によれば、貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積の関係から貨幣資本の源泉について考察すると、次の4つの要因が挙げられるという<sup>91)</sup>。

- (1) 現実資本の拡大再生産が行われ、その増大分が貨幣形態で蓄積される。しかしこのままでは利益を生まないで利子を求めて貸付資本市場に流入する。
- (2) 入手してから漸次的に消費支出される貨幣所得(地代や利潤中資本家の消費にあてられる部分、および労賃の一部)は、

89) [20]p.67 邦訳 54頁

90) 本論文14頁参照のこと。

91) [46] 234 ~ 235頁

現実に支出されるときまでは銀行に預けられて貸付けられるべき貨幣資本に転化する。

(3) 銀行の集中による貨幣取扱の大規模化は、相殺率を高め、一部の貨幣を節約し、遊離させる。これは信用制度の発展とともに大きくなる。また産業構造の変化(垂直統合、中間商人の排除など)によっても貨幣は節約される。こうした貨幣は貸付けられるべき貨幣資本に転化する。

(4) 産業資本が縮小すると、資本は貨幣形態に沈殿し遊離の方向に向かう。

シュンペーターの貨幣資本の源泉は銀行による信用創造であるが、これは(1)の要因に入れることができる。シュンペーターの場合、新結合の遂行による拡大再生産の前に銀行によって信用創造が行われ貨幣資本が発生するが、その後の貸付貨幣資本の発生経路は(1)と同じである。しかし(2)(3)(4)による貨幣資本は本来、退蔵貨幣の範疇に入れられるため、シュンペーターはこれらの貨幣資本を見ることができない。ところがシュンペーターが見過ごしたこれらの貨幣資本は、産業構造に積極的な影響を与える貸し付け資本となる潜在的能力を持っており、資本的な側面をもった退蔵貨幣なのである。動態的な貨幣を観察するのならば、これらの貨幣も当然資本の範疇に入れられるべきであったであろう。かくて、シュンペーターの偏った資本概念の背景には、やはりフレームワークである貨幣観が作用しているといわねばならない。フレームワークである貨幣観から、貨幣は流通しなければその機能を果たし得ないとする主張を絶対視するあまり、シュンペーターはそれを信用にまで拡張するのであるが、それは信用の資本的側面を分析する際には明らかに障碍になったのである。

#### 4. 「貨幣の信用理論」との関係

以上見てきたシュンペーターの信用概念および資本概念の未整備は、これらの問題を扱うときには無視することのできない貨幣観と関連していると考えられる。シュンペーターはフレームワークである貨幣観にかかわるもの、つまり貨幣の動態理論を、信用現象を観察し把握することで導き出そうとしていたのではなからうか。貨幣の動態理論を念頭に置いたとき、シュンペーターのヴィジョンの中に初めに存在していたのは信用現象であって、それに適合するような貨幣観を選択しようとしていた。シュンペーターは分析方法として「信用現象」から接近していく方が、貨幣から接近していくよりも相応しいと考えていたと思われる記述がある。

「理論的にいえば、現実社会の信用取引に到達するために、鑄貨 現実論に譲歩して、鑄貨さらに不換政府紙幣を付け足す場合でさえ - から出発するのが、果たして最も有効な方法であるか否かは決して明瞭ではない。 < それよりも > 先ず最初にこれらの信用取引から出発して、資本主義金融を以て、債権債務を相殺しその差額を繰り越していく手形決済制度と見る - したがって「貨幣」による支出は、一つの特殊な場合にすぎず、なんら特別の基本的重要性を持つものではなくなる - のが、もっと有効な方法であるかもしれない。<sup>92)</sup>」

しかし直感では信用現象からのアプローチを試みたものの、実際に理論を構成していく段階では明らかに貨幣からのアプローチ、フレームワークとしての貨幣観を基礎にそこから離脱できなかったことは、信用概念の未整備、信用の二側面の混同を見る限り否めない。つまり、信用現象を観察しながらもそれを貨幣の信用理論の中で捉えることができず、結局は信用の貨幣理論すなわち信用を貨幣の範疇を越えたところ

92) [23]p.717 邦訳第4巻1503頁

で議論することができなかつたのではなからうか。これはシュンペーターが銀行学派への批判として述べたことがそのままシュンペーター自身に帰ってきたことになる。もう一度、シュンペーターの言葉を引用したい。

「ソートンからミルに至るイギリスの指導者達は、信用構造の探索をなしたし、またこれによって、貨幣分析に対する彼らの主要な貢献となつてはいるが、然し信用の貨幣理論のタームを以てしては適切に述べられなかつた発見をなしたのである。ところが彼らは、これらの発見の理論的な意味内容の完成、すなわち体系的な貨幣の信用理論の構築をなすことができなくて、原理的には<依然として>信用の貨幣理論に膠着していた。<sup>93)</sup>」

ここでシュンペーターは、多少なりとも自分は貨幣の信用理論を手中におさめていると考えていたからこのような表現をしたのであろう。恐らく、シュンペーターによる貨幣の信用理論の解釈は、貨幣の概念を銀行貨幣に一元化することにあると考えていたのではないかと思われる。しかしこの概念では、全面的に貨幣の信用理論を受容しているとは言い難く、シュンペーター自身の記述からも貨幣の信用理論への期待と、それを取り入れることへの躊躇を読みとることができる。

「実践的にも理論的にも、貨幣の信用理論 (credit theory of money) のほうが、恐らくは信用の貨幣理論 (monetary theory of credit) よりも、もっと好ましいものであろう。<sup>94)</sup>」

シュンペーター自身の混乱は貨幣理論の完成を妨げただけでなく、シュンペーターの立場をも曖昧にし、この分野における彼の功績を評価し難くしてしまったのではなからうか。このような例は、銀行学派と通貨学派の銀行信用に関する論争に対するシュンペーターの記述と、

その後のシュンペーター貨幣・信用理論研究の動向に見ることができるであろう<sup>95)</sup>。

しかしシュンペーターが自分の理論をどちらかに特定することの困難を認め、結論を留保しているために<sup>96)</sup>、研究者の解釈の仕方によってはどちらの主張にも捉えられてしまうというのが当該問題研究の現状である。アーリーのように、銀行学派の潮流にシュンペーターを位置づけながらも、シュンペーター貨幣・信用理論の両義的な側面を「挫折した信用主義者」として独自の領域に位置づける解釈もおこなわれることになるのである。

このような混乱の原因に、フレームワークである貨幣観と動的な貨幣理論との両立不可能性から生じるシュンペーターの貨幣・信用理論の未整備があったことはもはや否定しえないであろう。

## 結 論

以上、シュンペーターはなぜ貨幣論を完成できなかったのかを問題意識としてシュンペーターの貨幣・信用理論の特徴を考察してきた。

シュンペーターの貨幣観はフレームワークである循環経済における貨幣の機能に大きく影響を受け、その影響は貨幣観のみならず信用概念をも支配した。ここで想定される貨幣の機能とは交換手段 (= 流通手段) 機能であり、そのためシュンペーターは流通しなければ貨幣は貨幣としての機能を果たし得ないと考えていた。

シュンペーターはこのような伝統的な貨幣観を保持しながら、「新しい信用理論」と呼ばれる信用創造理論に着目し、理論に取り入れる。信用には債権債務関係を背景に支払手段として貨幣の機能を代替する貨幣的側面と、企業へのファイナンスとして機能する資本的側面、二つの

93) [23]p.718 邦訳第4巻1504頁

94) [23]p.717 邦訳第4巻1504頁

95) [22]p.115 邦訳( )168頁

96) [22]p.115 邦訳( )168頁

側面がある。シュンペーターは経済発展の過程を分析する際、新結合を担う企業者へのファイナンスとしての信用の資本的な側面のみを取り上げているのだが、現実の信用取引を観察する際無視することのできない信用の貨幣的側面も、両者の区別を曖昧にしたまま理論に取り入れる。そしてフレームワークである貨幣観から貨幣は流通しなければその機能を果たし得ないとする概念を絶対視するあまり、シュンペーターはそれを信用にまで拡張したのであるが、それは信用の資本的側面を分析するには明らかに邪魔になったのである。

またフレームワークである交換手段としての貨幣観からは、退蔵貨幣に本質的な役割を見出すことができず、この問題はシュンペーターの資本概念に制約を加えるとともに、動態における貨幣機能の把握を困難にする要因にもなった。退蔵貨幣の形態をとっている貨幣資本も経済に積極的な影響を与える潜在的な能力を持っているのであるが、シュンペーターはこのような貨幣資本を分析の範疇に入れることができず、資本概念の範囲を狭め、動態における貨幣機能の把握を困難なものにしてしまったのである。

動態における貨幣を分析する際、信用現象をどのように貨幣理論に取り込むかが重要なポイントであることをシュンペーターは十分に理解していた。しかしシュンペーターの分析は、信用の貨幣的側面と資本的側面を明確に区別することができなかつたために、信用を貨幣の範疇を超えたところで議論することに失敗していると判断せざるを得ない。この点にシュンペーターの貨幣・信用理論の特徴があると同時に、貨幣論の完成を妨げた原因もまた存在していると思われるのである。

しかしシュンペーターが評価されるべきは、貨幣理論に関する分析装置を提示し得たか否かではなく、彼の壮大な経済理論のなかで「貨幣を理論の基層」に位置づける貨幣的経済理論を構築しようとした姿勢ないしはそれを構想しよ

うとした知的ヴィジョンの獲得にあるのではなからうか。また、この意味でも貨幣論の完成はシュンペーターにとって、その体系の帰趨をはかる至上命題ともいふべきものであったと言えるだろう。

## 参考文献

- [1] Earley, J.S. *A Frustrated Creditist. New perspectives in monetary macroeconomics* ed. by Dymski, G. and Pollin, R. University of Michigan 1994
- [2] Earley, J.S. *Schumpeter and Keynes Dissimilar Twin Revolutionists* *History of Economics Review*, 21 Winter 1994
- [3] Harris, S.E. *Schumpeter: Social Scientist 1951* 『社会学者シュムペーター』中山伊知郎 東畑精一監修 東洋経済新報社 1955年
- [4] Hedtke, U. and Swedberg, R., *Joseph Alois Schumpeter Briefe Letters*, Mohr Siebeck, 2000
- [5] Helmstadter, E. and Perlman, M. *Behavioral Norms, Technological Progress, and Economic Dynamics* The University of Michigan Press 1996
- [6] Keynes, J.M. *A Tract on Monetary Reform*, 1923. 『貨幣改革論』 中内恒夫訳 東洋経済新報社 1978年
- [7] Keynes, J.M. *A Treatise on Money 1 The Pure Theory of Money*, 1930. 『貨幣論』 小泉明 長澤惟恭訳 東洋経済新報社 1979年
- [8] Khan, M.S. *Schumpeter's Theory of Capitalist Development*, 1957. 『シュンペーターの資本主義発展論』 金指基訳 現代書館 1972年卒論
- [9] King, R.G. *Finance and Growth: Schumpeter Might Be Right* *Quarterly Journal of Economics*, 108 August 1993

- [10] Knapp,G.F. *Staatliche Theorie des Geldes* Duncker&Humblot 1905
- [11] Macleod,H.D. *The Theory of Credit Vol.1 ~2* EDIZIONI BIZZARRI 1890
- [12] Marz,E. *Joseph Alois Schumpeter-Forscher, Lehrer und Politiker* R. Oldenbourg Verlag 1983 『シュムペーターのウィーン 人と学問』 杉山忠平監訳 中山智香子訳 日本経済評論社 1998年
- [13] Minsky,H.P. *Money and Crisis in Schumpeter and Keynes The Economic law of motion of modern society* Cambridge University Press 1986
- [14] Moss,L. ed. *Joseph A . Schumpeter , Historian of Economic Thought* ROUTLEDGE 1994
- [15] Naderer,B. *Die Entwicklung der Geldtheorie Josph A.Schumpeters* Duncker&Humbolt 1991
- [16] Scherer, F.M. and Perlman, M. *Entrepreneurship ,Technological Innovation, and Economic Growth* The University of Michigan Press 1992
- [17] Schumpeter,J.A. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie* Leipzig 1908 『理論経済学の本質と主要内容』 大野忠男 木村健康 安井琢磨訳 岩波書店 1983年
- [18] Schumpeter, J.A. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung [2.aufgabe]* , Duncker&Humblot 1926. 『経済発展の理論』 中山伊知郎 東畑精一 塩野谷裕一訳 岩波書店 1977年
- [19] Schumpeter,J.A. *Epochen der Dogmen und Methodengeschichte*, 1914. 『経済学史 学説並びに方法の初段階』 中山伊知郎 東畑精一 訳 岩波書店 1980年
- [20] Schumpeter, J.A. *Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige : Glossen und Beitrage zur Geldtheorie von heute,1917/1918* aus *Aufsätze zur Okonomischen Theorie*, J.C.B. MOHR (Paul Siebeck) Tubingen 1952 . 『貨幣・分配の理論』 三輪悌三訳 東洋経済新報社 1961年
- [21] Schumpeter,J.A. *Die Krise des Steuerstaats*,1918. 『租税国家の危機』 木村元一 小谷義次訳 岩波書店 1983年
- [22] Schumpeter,J.A. *Business Cycles : A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process* ,1939. 『景気循環論-資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析-』 ( ) ~ ( ) 吉田昇三監修 金融経済研究所 有斐閣 1958/64年
- [23] Schumpeter,J.A. *History of Economic Analysis*,Oxford University Press 1954 『経済分析の歴史』 1 ~ 7巻 東畑精一訳 岩波書店 1955/62年年表、論文、景気循環
- [24] Schumpeter,J.A. *Das Wesen des Geldes* ed. by Fritz Karl Mann Vandenhoeck und Ruprecht 1970
- [25] Schumpeter,J.A. *Essays of J.A. Schumpeter* ed.by R.V.Clemence Transaction publishers 1951
- [26] Schumpeter,J.A. *Ten Great Economists From Marx to Keynes* ROUTLEDGE 1997
- [27] Schumpeter,J.A. 『社会科学の過去と未来』 玉野井芳郎監修 ダイアモンド社 1972年
- [28] Schumpeter,J.A. 『景気循環分析への歴史的接近』 金指基 訳、編 八朔社 1991年
- [29] Shah,P.J. *Schumpeter on Monetary Determinacy History of Political Economy* , 26 Fall 1994
- [30] Shionoya,Y.and Perlman, M. *Schumpeter In The History of Ideas* The University of Michigan Press 1994
- [31] Stolper,W.F. *Joseph A.Schumpeter The Public Life of a Private Man* PRINCETON



- 1994
- [32] Swedberg,R. *Schumpeter A BIOGRAPHY* PRINCETON 1991
- [33] Swedberg,R.ed. *Joseph A.Schumpeter The Economics and Sociology of Capitalism* PRINCETON 1991
- [34] Talele,C.J. *Keynes and Schumpeter : New Perspectives* Avebury
- [35] Taylor,O.H. 『シュンペーター経済学の体系』金指基訳 学文社 1976年雑誌
- [36] Wagner,V.F. *Geschichte der Kredittheorien* Verlag Von Julius Springer 1937
- [37] Wood,J.C. ed. *J.A.SCHUMPETER Critical Assessments* VOL. ~ ROUTLEDGE 1991 経済学史、人物
- [38] 青木泰樹 『シュンペーター理論の展開構造』御茶ノ水書房 1987年
- [39] 赤川元章 「ドイツ資本主義の対外発展とその金融的構造（1914以前）」『三田商学研究』33巻2号 1990年
- [40] 伊東光晴 根井雅弘『シュンペーター 孤高の経済学者』岩波書店 1994年
- [41] 伊東光晴 「シュンペーターの現代的意味・創造的破壊」『週刊 東洋経済』5160 東洋経済 1993年
- [42] 大友敏明 『信用理論史』慶應義塾大学出版会2001年
- [43] 大野忠男 『シュムペーター体系研究』創文社 1983年
- [44] 金指基 『シュンペーター研究』日本評論社 1987年
- [45] 金指基 『シュンペーター再考』現代書館 1996年
- [46] 川合一郎 「二つの信用理論ケインズとハイエク」『川合一郎著作集』第1巻、有斐閣 1983年所収
- [47] 木村健康 「シュンペーターの貨幣理論」『経済学論集（東大）』3巻4号 1933年
- [48] 経済学史学会 『経済学史—課題と展望—』九州大学出版会 1992年
- [49] 小谷義次ほか『マルクス・ケインズ・シュンペーター経済学の現代的課題』大月書店 1991年
- [50] 塩野谷裕一 「シュンペーターにおける科学とイデオロギー」『三田学会雑誌』76巻6号 1984年
- [51] 塩野谷裕一 『シュンペーター的思考』東洋経済新報社 1995年
- [52] 杉本栄一 『近代経済学の解明』岩波書店 1981年
- [53] 杉山忠平 『イギリス信用思想史研究』未来社 1963年
- [54] 戸原四郎 「ヒルファディングの貨幣論の現実的背景 - オーストリーの通貨事情との関連をめぐって-」『社会科学研究』28巻4・5合併号 1977年
- [55] 根井雅弘 「資本主義の二つのヴィジョン ケインズとシュンペーター」『エコノミスト』(1989.8.15) 1989年
- [56] 花輪俊哉 『貨幣と金融経済』東洋経済新報社 1980年オーストリー学派
- [57] 濱崎正規 『シュムペーターの体系の研究』ミネルヴァ書房 1996年出版
- [58] 林田睦次 『ケインズ体系とシュンペーター体系』多賀出版株式会社 1983年
- [59] 福岡正夫 「ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター 生誕100年」『三田学会雑誌』76巻6号 1984年
- [59'] 藤瀬浩司 吉岡昭彦 『国際金本位制と中央銀行政策』名古屋大学出版会
- [60] 麓健一 『信用創造理論の研究』東洋経済新報社 1953年
- [61] 北条勇作 『シュンペーター経済学の研究』多賀出版株式会社 1983年
- [62] マルシャル・J ルカイヨン 『貨幣的分析の基礎 ヴィクセルからケインズまで』菱山泉訳 ミネルヴァ書房 1978年
- [63] 三輪悌三 『貨幣金融論』東洋経済新報

社 1979

- [64] 三輪悌三 「信用創造論の批判的考察」  
『金融経済』2 1949年
- [65] 三輪悌三 「信用創造論の二形態—シュムペーター「経済発展の理論」とケインズ「雇用、利子及び貨幣の一般理論」との関連において—」『金融経済』12 1952年
- [66] 八木紀一郎 『オーストリア経済思想史研究 中欧帝国と経済学者』 名古屋大学出版会 1988年